



Title	The Generative Mechanisms of Structuring Events and Realizing Arguments
Author(s)	境, 倫代
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54315
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【19】

氏 名	さかい とく た みち よ 境 (徳 田) 倫 代
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学 位 記 番 号	第 2 3 9 0 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	The Generative Mechanisms of Structuring Events and Realizing Arguments (事象構造と項実現の生成メカニズム)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 由本 陽子 (副査) 教 授 春木 仁孝 教 授 岡田 伸夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論では、(1)に示すような、動詞によって意味項(semantic argument)として認可されていない名詞句や、動詞に含意されない経路表現や二次述語が動詞後統句として生起している文がどのようなメカニズムの中で生成されるのか、また容認性をどのように予測することができるかを、生成語彙論(Pustejovsky 1995)の枠組みの中で分析することを目的としている。具体的には、(1a)で示す結果構文、(1b)で示す移動構文、(1c)で示すWay構文を分析対象とし、概念構造(Conceptual Structure)で構築された意味構造がどのように統語構造(Syntactic Structure)に反映され、その結果派生的な意味が生成されるかを明らかにする。

- (1) a. John ran his shoes threadbare.
- b. John danced out of the room.
- c. Frank dug his way out of the prison.

Jackendoff(1990)やGoldberg(1995)は上記のような構文がある種の構文のイディオムとみなし、それぞれの構文自体に意味があるという立場をとる。本論では、文の意味は構成素の意味から推測可能であるという語彙意味論の立場をとり、特に、動詞と後続句の意味的特性が統語構造に反映され、派生的な意味解釈が導き出されるという分析を行う。

動詞が表わす事象において、必須の参加者は意味項として統語上に実現される。この場合、動詞が本来持っている事象構造鋳型(event structure templates)が統語構造に反映されていると考えられる。それに対して、必須の意味項以外の参加者が統語上に実現される場合がある。このような場合には事象構造鋳型に拡張が起こっていると考えられる。動詞が意味項として認められない参加者が統語上に生起するにはどのような条件が求められるのかについて、本論では、Kaufmann and Wunderlich (1998)とWunderlich (2000)が項表現の拡張について提案している制約に着目した。彼らは、事象構造鋳型の拡張には、まず上位事象と下位事象の間に共有項がなければならずと論じている。しかし、彼らの分析では明示的な共有項がない場合、言い換えれば、後続名詞句が動詞に認可されない名詞句の場合に、どのようにして共有項を導き出すことができるのかが明確ではない。

本論では、上位事象と下位事象の共有項を導き出すために、動詞と後続名詞句について、項構造、事象構造、クオリア構造という3つのレベルから成る意味表示を用いてそれぞれの意味的特性を表わした。クオリア構造を用いた意味表示は、語の複雑で多面的な意味的特質を精緻に表わすことが可能であるからである。このクオリア構造を用いた意味表示レベルにおいて、動詞によって表わされる上位事象と動詞の後続構成素によって表わされる下位事象との間に共有される値があるかどうかを考察した。この考察から、以下のような共有値がある場合には、動詞に意味項として認可されない参加者であっても後続名詞句として統語上に生起し、事象構造鋳型の拡張が起こるということを通り導き出し、その結果派生的な意味が生成されるという提案をする。

- (2) a. クオリア構造を用いた意味表示レベルにおいて、統語上に現われていない動詞の意味項(unexpressed argument)、動詞が表わす事象の参加者ではあるが必ずしも統語上に生起しない項(default argument)、動詞の語彙情報の中に内包されている項(shadow argument)のいずれかの値が後続名詞句のクオリア構造内の構成役割の値 (the value of the CONSTITUTIVE role)あるいは後続名詞句そのものと一致する場合。
- b. 動詞のクオリア構造内の主体役割 (AGENTIVE role) の値と後続名詞句のクオリア構造内の目的役割 (TELIC role)の値が一致した場合。

上記の条件が両方とも成立する場合、事象構造鋳型の拡張が起こり、文の容認性は高く、どちらの条件も満たさない場合、事象構造鋳型の拡張は発生しないと考えられ、文も容認されない。またどちらか一方の条件のみ成立する場合には、容認性は不安定なものとなる。

このように、クオリア構造を用いた意味表示レベルにおける動詞と後続構成素間の共有値の有無は、動詞後続構成素の生起を予測する上で重要な役割を果たす。本来移動そのものを含意するのではなく、移動の様態を表わす動詞(verbs of manner of motion)、身体の内的活動を表わす動詞(verbs of body-internal action)、音の放出を表わす動詞(verbs of sound emission)が経路前置詞句と共起可能かどうかを予測する場合にも、本論の提案するクオリア構造レベルでの共有値を用いた分析を適用することができる。クオリア構造を用いた意味表示レベルにおいて、動詞と経路前置詞句あるいは名詞句 one's way の間に、共有値として move が存在するとき、共起が可能となる。さらに、移動構文に生起可能な動詞の中で、移動様態動詞と内的身体活動動詞のみが再帰代名詞と共起可能であるという点に関する分析においても、クオリア構造に記載される語彙情報から予測が可能である。

- (3) a. John ran himself to the station.
b. John danced himself out of the room.

移動構文に生起する他の動詞とは異なり、これらの動詞に関しては、上述の意味表示レベルにおける項構造に、通常、動詞の意味情報に内包されているshadow argumentとして、行為者の身体(an actor's body)を値として設定することが可能である。このことから、再帰代名詞はその内包された項が顕在化したものとして捉えることができると本論では主張する。

最後に、Way構文において、名詞句 one's way と共起することによって、主語が動詞によって表される行為を行いながら経路前置句によって表わされる場所へ移動していくという派生的な意味はどこから生じるのかという問題に関しても、クオリア構造を用いた意味表示が提供する語彙情報を用いて分析することが可能であると

主張する。この場合、構文に生起可能な動詞のグループを分析し、創造動詞、獲得動詞、内的身体活動動詞、音放出動詞、身体過程動詞などがその主要なグループであると主張する。その上で、内的身体活動動詞と音放出動詞については上記に述べた移動動詞と経路前置詞句と同様に、動詞と名詞 way の間に共有する値 move を見出すことによって、Way構文の生成と派生的意味を導き出すことができると論じる。さらに、創造動詞と獲得動詞については、動詞とその補部としての名詞 way のクオリア構造が、共合成(co-composition)という操作によって融合し、名詞 way の主体役割の値 move が動詞の主体役割の中に埋め込まれる。その結果、主動詞の表わす行為と move という行為が同時に発生することになり、Way構文の持つ意味解釈が導き出されると提案する。

以上のように本論では、構成素の意味からは文全体の意味が導き出せないのみならず、従来、構文的イディオムとして捉えられてきた構文を分析対象とし、動詞と後続句がそれぞれに持つ意味的特性に基づいて、統語構造と派生的意味を予測することができることを主張した。その予測の基盤となるものは、クオリア構造を用いた意味表示に記載される複雑で多面的な語彙情報と、クオリア構造の合成という操作によって新たに生成される動詞句の意味表示から得られる情報によるものである。この合成を引き起こす要因もまたクオリア構造内の語彙情報に見出すことが可能であることを主張した。このように、本論では、語の持つ意味的特性を精緻に記述することによって、その特性から動詞とその後続句の共起可能性を予測するメカニズムを提案し、イディオムとして扱われてきた構文を語彙意味論の立場から分析可能であるということを主張した。

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、動詞本来の意味においては項として認可されない目的語、前置詞句 (PP) や二次述語などが生起している文の解釈と容認性について、従来よりも精緻な語彙意味記述を用いれば、語彙意味論的分析で説明可能であることを示すことである。

2章では本論の基盤となる理論として、Jackendoff(2002)の文法モデルとPustejovsky(1997)の生成語彙論において提案されたクオリア構造による語彙意味記述を用いる分析手法が説明されている。

3章では、結果構文を扱い、動詞の意味項ではない名詞句や結果述語が生起するのは、①動詞のクオリア構造内に名詞またはそのクオリア構造 (特に構成役割) 内の項と一致する項が含まれ、②動詞の主体役割と名詞の目的役割内でイベントの共有が認められる場合であるという主張をし、その解釈メカニズムを示している。4章では、動詞自体は本来移動を表さないにもかかわらず、PPあるいは再帰目的語+PPと共起することによって移動を表わす構文について3章と同じ手法による分析が示されている。5章ではWay構文をとりあげ、クオリア構造における共合成という操作により、名詞 wayの主体役割が動詞の主体役割内に埋め込まれた結果、移動の意味が導かれると主張している。6章では、事象構造の拡張がどのような条件のもとに可能であるか、また、それに伴い動詞の意味項でない名詞句がいかに認可されるかについて各章の分析が総括されている。

本論文は、従来構文イディオムとして、あるいは語用論の問題として片付けられていた特殊な結果構文、移動構文やWay 構文について、一貫して文の意味は構成素の意味の合成によって導かれるという観点にたった分析を示そうとした点で独創的である。現時点ではまだまだ記述的な側面が強く、取り上げられた各構文の容認性について十分に予測可能な分析とは言い難いが、生成語彙論による分析の可能性を示した点において理論的貢献は評価に値するものと言える。よって、本論文は博士(言語文化学)の学位論文として十分価値のあるものと認める。